

## 隅田川と江東地域 ④

## 深川佐賀町と隅田川

江東区深川江戸資料館

深川江戸資料館総合展示室に繰り広げられている、江戸の町並みの舞台は、深川佐賀町です。この町は現在も隅田川沿岸の町として江東区佐賀1丁目・2丁目として存在しています。

本号では、佐賀町という町がどのようにして誕生し、発展してきたのかを隅田川とのかかわりの中で探ってみましょう。

### 獵師町の成立

図1は、江戸初期の頃の佐賀町周辺を画いた地図です。年代は不詳ですが小名木川より南の地域には海が深く入り込んでいたようすがうかがえます。その中で隅田川沿岸に半島のように突き出した陸地の中心部が後の佐賀町になります。この「半島」に、寛永6年(1629)深川獵師町が開かれました。「獵師」と書く山で熊や狸、鳥などの動物を捕まえる人をイメージしますが、江戸時代は漁業の「漁師」もこの文字を使用し、史料の中でも「深川獵師町」として登場します。

深川相川町(現江東区永代)の町名主・相川新兵衛家が書き継いできた記録、『寛永録』(東京都公文書館蔵 江東区教育委員会より刊行)の記述を要約すると、「深川付近で漁をしていた獵師が、潮除け堤外の干潟しおよの場所を町場に取り立てさせてほしい」旨を言上し許可されました。「潮除け堤」とは定かではありませんが、小名木川南岸付近にあった護岸のような場所でしょうか、その外側の「干潟の場所」こそ、前述の「半島」にあたります。

干潟の開発にあたったのは、新兵衛・藤左衛門・次郎兵衛ら8人の獵師を中心とする人々で、その開発者の名を取って獵師町の中に8つの町ができました。このうち、のちに佐賀町になるのは藤左衛門町・次郎兵衛町の2ヶ町です。深川獵師町総体の範囲は、現在の清澄・佐賀・福住周辺にあたります。

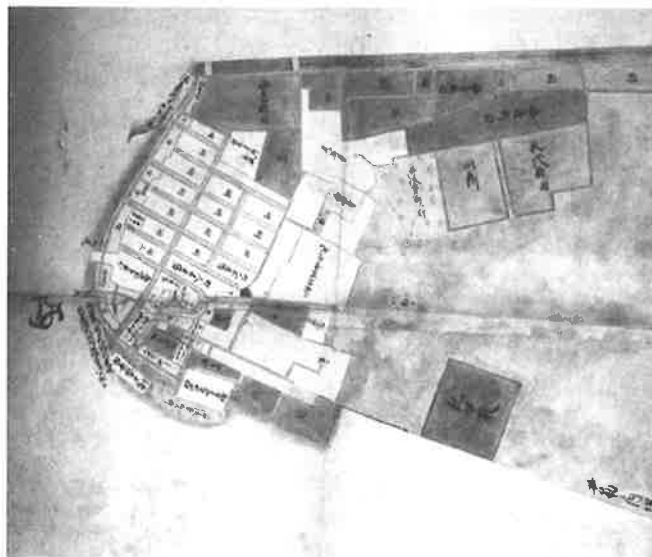


図1 深川絵画図 深川江戸資料館蔵 成立期の佐賀町

### 材木置場へ

獵師町として出発した佐賀町は、10年後に大きな変化を遂げることになります。寛永18年(1641)の江戸大火です。江戸城外堀の整備、武家地・町人地の拡充など新興都市・江戸は建設の真っ最中。材木置場は日本橋通町筋(現中央通り)東側の材木町や神田佐久間町河岸(神田川沿岸)などでした。

しかし、日本橋桶町(現中央区八重洲付近)から出火して武家屋敷・江戸市中を焼いた火事の原因は、そこに高積みされていた材木の延焼だったことから、幕府は「新たな材木置場」、木置場を探し、隅田川東岸の深川獵師町付近に用地を定めました。ことにのちの佐賀町は、その中心部にあたる地域になりました。

図1はまさに材木置場が隅田川沿岸にあったところのようすを伝えています。この時、火災の発生や材木の焼失を防ぐため、掘割りを縦横に開きました。のちの仙台堀・中之堀・油堀などの運河の原形がこの時造られました。

## 「蔵の町」へ

元禄8年(1695)、それまで深川藤左衛門町・同次郎兵衛町と呼ばれてきたこの境界が深川佐賀町という町名に変わりました。「肥前国佐賀之湊ニ形チ似寄候」(『町方書上』)と、九州佐賀の湊に地形が似ていたことから命名されたと説明されています。はるか九州の土地の記憶が摺り込まれた町名。深川を開拓した深川八郎右衛門も上方の人。初期の開拓者たちの意識が町名に

なったのかもしれませんが。そして町名が変更されたあたりから、「材木置場・佐賀町」に新たな変化が見られました。

元禄11年(1698)には佐賀町から日本橋へ永代橋が架けられ、江戸の中心日本橋・京橋から近くなりました。そして翌年には周辺地域が御用地として召し上げられ、同時に東方の入り江埋め立てが開始され、元禄14年(1701)材木置場が隅田川沿岸からこの入り江を埋め立てて作られた用地に移転することになりました。こうして佐賀町は、材木置場から江戸の経済を支える「蔵の町」として発展しました。

それには、佐賀町が隅田川流域にあたり、日本橋・京橋など大店・大問屋が集中する、江戸経済の中心地に至近の距離だったこと、さらに八町堀・靈巖島といった日本橋の東に隣接し深川にも近い地域が倉庫街として機能していたこと、そして材木置場の深川移転によって、深川に仙台堀をはじめ水路(運河)が開かれ、海浜にも面していたこと、ことに佐賀町は隅田川河口部にも近く、十分に「蔵の町」としての役割をこなす基礎が作られていました(図2参照)。

佐賀町には町を南北に貫く通りがあり、その西側、隅田川沿岸には河岸屋敷と呼ばれる蔵が立ち並び、一方の通りの東側には表店として商店が並んでいました。隅田川から直接河岸屋敷の蔵に品物を納め、それを通り1つはさんだ店舗で商うといった町のシステム

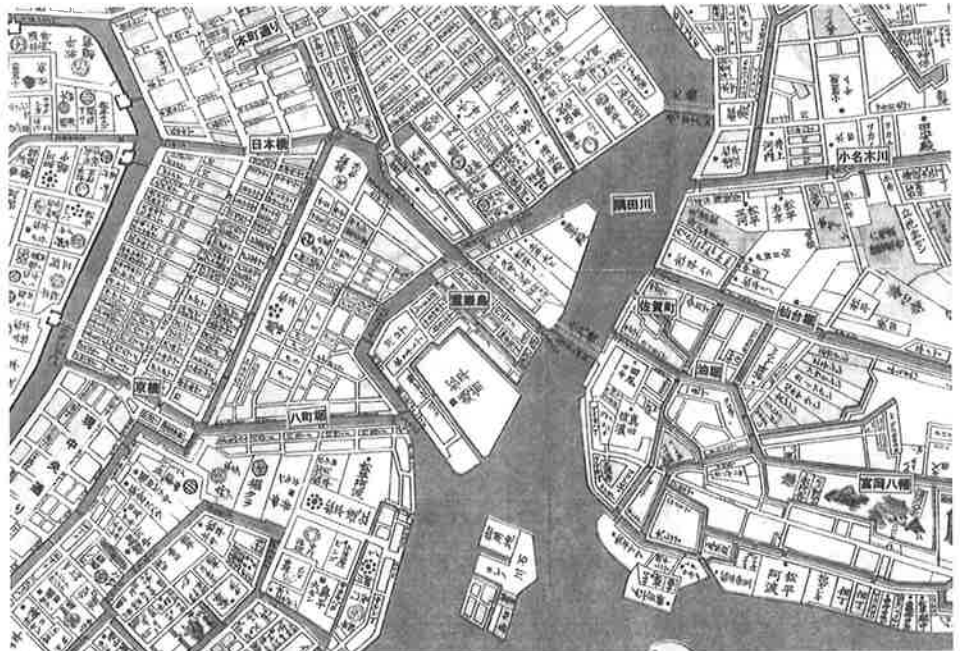


図2 御江戸大絵図(複製)天保14年(1843)  
日本橋界隈と靈巖島・深川周辺が江戸経済をになっていました。

が作られていました。また、東へと伸びる仙台堀・中之堀・油堀などの沿岸にも蔵がひしめき合っ立ち並んでいました。特に中之堀南側には三井家の貸蔵が30棟ほど設けられ、中之堀に面して8戸の蔵が並ぶ様子は、佐賀町を象徴する光景だったようで、「八戸前」(やとまえ)という里俗名まで生まれました。

ではどんな物資が集められたのでしょうか。嘉永4年(1851)に編纂された『諸問屋名前帳』などから、おもな取扱商品をみると米・雑穀・味噌・干鰯<sup>ほしか</sup>・魚油・炭薪<sup>ぬか</sup>・糠・茶などとなります。これらの商品の多くは東北・関東から河川で運ばれてきた商品が多く、関東一円の河川交通(奥川筋<sup>おくかわすじ</sup>という)の終着点だったとも言えます。

## 隅田川の蔵

隅田川沿岸には、幕府旗本や御家人への給付米を貯蔵し管理する浅草御蔵や対岸の御竹蔵、その南新大橋の北側にあった御船蔵など、寛文元年(1661)の創架以来公儀の橋として存続した両国橋周辺には公の蔵が両岸に並んでいました。

これに対して下流にあたる深川佐賀町周辺には、問屋の蔵や貸蔵が立ち並び、物資を搬送する荷船や通りの荷車の音、売り買いの声などが交錯する活気と張りのある町となりました。